

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	久保 研二
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>体育授業における「リフレクション」の実態と変容に関する研究</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 木原成一郎</p> <p>審査委員 教授 東川安雄</p> <p>審査委員 教授 山崎敬人</p> <p>審査委員 准教授 大後戸一樹</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>現在の教員養成や教師教育において「リフレクション」という概念は重要な意味を持っている。実際、体育科教育を含む様々な分野で、「リフレクション」に関する研究が数多くなされてきている。しかしながら、この「リフレクション」という言葉は、教師教育を含む教育研究の様々な分野で用いられており、その定義についても複数存在している状況である。</p> <p>本研究の目的は、「リフレクション」概念の検討を通して、教師に求められる「リフレクション」概念の整理を行うこと、整理した「リフレクション」概念をもとに、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階の「リフレクション」の実態や変容について、事例的に明らかにすることの2点である。</p> <p>論文の構成は以下のとおりである。序章では、問題の所在と本研究の目的を述べた。第1章では、教師教育で用いられている「リフレクション」の概念について整理し、その整理された概念にもとづいて今まで行われてきた体育科教育研究における「リフレクション」概念の分類を行った。その結果、Schön（1983）が重視した、自己の実践を対象に行う「行為の中のリフレクション」とその「行為の中のリフレクション」を対象に行う「行為についてのリフレクション」を区別して分類した。さらに、「行為の中のリフレクション」以外の事象に関しても「行為についてのリフレクション」を行っていくことの必要性について明らかにした。また、「リフレクション」の対象に関して、自己の実践だけでなく、他者の実践、さらには理論も含むことの必要性に言及し、それらを踏まえた形で「リフレクション」概念を整理した。さらに、教師教育研究や体育科教育研究で「リフレクション」に関する研究を行っていく際には、そこで分析する「リフレクション」の対象を、今回整理した「リフレクション」概念にもとづき、あらかじめ明確に示しておく必要があることを指摘した。</p> <p>第2章では、大学学部生を対象に、教員養成課程における体育の授業科目で行った模擬授業に関する実践を対象とした「リフレクション」および、この授業科目で学んだ理論を対象とした「リフレクション」の実態について事例的に明らかにした。その結果、実践を対象とした「リフレクション」および理論を対象とした「リフレクション」のどちらも、初任教師の課題である「問題の発見」を達成し、「問題の解決」のレベルに到達していることが分かった。また、実践を対象とした「リフレクション」のレベルが高い学生が、必ずしも理論を対象とした「リフレクション」のレベルが高いわけではないことが明らかにな</p>			

った。そのため、実践を対象とした「リフレクション」を行う機会だけでなく理論を対象とした「リフレクション」を行う機会を保障していくことが必要であることを指摘した。

第3章では、大学院生を対象に、小学校においてティーム・ティーチングの副指導教師として参加した授業と主指導教師として実施した授業の実践を対象とした「リフレクション」を比較し、その変容と要因について事例的に明らかにした。その結果、「リフレクション」の焦点、レベルともに教師としての成長と捉えることができる変容を見て取ることができた。また、このような成長と捉えることのできる「リフレクション」の変容を生んだ要因として、メンターである教諭と十分なメンタリング関係を築けたこと、また、メンターが常に非指示的な援助を行ってきたことの2つが指摘できた。

第4章では、「若手教師」段階の教師の採用1年目の実践を対象とした「リフレクション」と、採用4年目の実践を対象とした「リフレクション」の変容を明らかにし、「若手教師」の教職経験に伴う成長について事例的に考察を行うとともに、その変容をもたらした要因についても事例的に考察を行った。その結果、「若手教師」の「リフレクション」の変容から、授業の中で明確な意図をもって指導を行ったり、「行為の中のリフレクション」を行いながら、予測していなかった状況を切り抜けたりする教師の成長がみられた。また、その要因として、管理職の影響、メンターの影響、同僚との日常的な子どもに関する会話、専門的知識を獲得するための研修会への参加があげられた。

終章では、ここまでの結果から、教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」の様態について考察を行った。まず、体育授業における「リフレクション」は、吉崎（1991）の示す単一の知識をもとにした「リフレクション」から、徐々に複合的な知識をもとにした「リフレクション」を行えるようになってくると考察された。次に、「行為の中のリフレクション」に関する「行為についてのリフレクション」に関しては、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階では、あまりみられず、「若手教師」段階になって、少しずつ出現してくると考えられた。今後の課題として、第1に、他者の実践を対象とした「リフレクション」に関する研究、「行為についてのリフレクション」の中で「行為の中のリフレクション」を対象としたものとそれ以外を対象としたものを区別した研究のそれぞれの実施、第2に、より多くの事例を積み重ねて研究成果を蓄積することがあげられた。

本論文は、以下の2点で評価できる。

第1に、「リフレクション」概念を整理し、「リフレクション」の対象に関して、自己の実践だけでなく、他者の実践、さらには理論も含む必要性を提案し、「リフレクション」の対象の相違を明確に示したうえで事例研究を行ったことは、体育科を含む教師教育領域の「リフレクション」研究の新たな可能性を切り開いたといえる。

第2に、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階における体育授業の「リフレクション」の実態や変容の研究成果は、教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」を行う力の形成を考えるための貴重な知見である。これまで実証的な成果に基づき解明されていなかった分野に新たな知見をもたらしたといえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月16日